

山県大会集録



第18回蠶光記念 北広島町児童生徒自画像展出品作品
(知的障害特別支援学級 1年生児童)

第65回広島県特別支援教育研究大会山県大会

目 次

1	大会を終えて	1
2	全体会記録	2
3	分科会記録	
①	特別支援学校： 生活単元学習	6
②	小 学 校： 生活単元学習	8
③	小 学 校： 特別支援学級（自閉症・情緒）教科の指導	10
④	小 学 校： 通常の学級と通級指導教室における指導	12
⑤	中 学 校： 作 業 学 習	14
⑥	難聴・言語障害のある児童生徒への指導	16
4	大会役員・実行委員会名簿	18

大会を終えて

第65回広島県特別支援教育研究大会山県大会を開催いたしましたところ、雨天にもかかわらず、県内各地から200名を超える多くの皆様にご参加いただき、無事に開催することができました。心より御礼申し上げます。

午前中の分科会では、6つの会場に分かれ、北広島町内各校の授業提案に基づく協議に加え、県内各地区の先生方から実践発表をいただきました。いずれの分科会においても、子ども一人一人に向こう教師のまなざしや、創意工夫に富んだ実践が数多く紹介され、参加者の皆様による熱心で実りある協議が展開されたものと感じております。特別支援教育の本質に迫る、学び深い時間となりましたことを、改めてうれしく思います。

また、午後の講演では、松江市立島根小学校の井上賞子先生より、「今、目の前にいる子の『わかった!』を目指して～学びにくさのある子へのデジタルやアナログでの支援を考える～」と題し、ご講演をいただきました。デジタルツールを活用しつつも、常に「子ども理解」を基盤に据えられた実践の数々に、私たちは深い感銘を受けました。誰一人取り残さない学びの保障とは何かを、改めて考える貴重な機会となりました。

本研究大会の主題は「自立に向けての一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方」でした。社会の中で子どもたち一人一人が自分らしく生きていく力をはぐくむために、特別支援教育に携わる私たちに今、何が求められているのか。本主題を通して、多くの気づきや学びを持ち帰っていただけたものと確信しております。

第65回という長い歴史をもつ本大会を終え、次年度開催地である福山市へとバトンを引き継ぎます。本大会で得た学びや気づきを、今後の実践へ確実につなげていくことこそが、子どもたちの笑顔と未来につながるもの信じております。今後とも、皆様とともに特別支援教育のさらなる充実と発展に努めてまいりたいと思います。

最後になりましたが、本研究大会の開催にあたり、格別のご指導・ご助言を賜りました広島県教育委員会、広島県立教育センター、西部教育事務所芸北支所管内市町の教育委員会をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

第65回広島県特別支援教育研究大会山県大会

現地実行委員長 江崎 繁

全体会講演

「今、目の前にいる子の「わかった！」を目指して

～学びにくさのある子へのデジタルやアナログでの支援を考える～」

講師 島根県松江市立島根小学校 教諭 井上賞子先生

講演会の要旨

学びに困難を抱える子どもたちへの支援において、①検討すべきは方法であること②適切な学習量を確保することという二点が大切である。その上で学習を成立させるためには「好きのチカラ」が重要であり、「好き」という気持ちは本人にとっての「学ぶ意義」となり学習を支えることにつながる。また、困難の背景を分析し、ICT やアナログ教材を活用して「これを使えばできる」と体感させることが大切である。

I 「方法」と「学習量」

● 「勉強が本当に嫌いな子どもには一人も会ったことがない」

子どもたちは、どうすればいいのかが分からぬ中で苦しんでいる。読むことや書くことに困難がある子どもたちは、学校という学習の場全体で「やってもやってもできない」「ダメだ」という体験を一年中繰り返しているのである。

● 従来の「努力」

困難を抱える子どもたちは、苦手な方法での繰り返しの学習（例：読めないので「大きな声で読みなさい」、書けないので「もっと書きなさい」）の中で追い詰められている。この状況に対して、方法そのものを変えずに量だけを増やすことは、子どもをさらに追い詰める行為に他ならない。

● 支援の原則：方法と量の見直し

① 検討すべきは「方法」である

子どもが苦手なことを苦手な方法で繰り返しているのであれば、違う方法が必要である。同じ方法では学びを深めることはできない。

漢字学習の困難事例分析

漢字の定着が進まない通常学級の児童 3 名の事例を通じて、同じ「できない」現象の背景が異なることを示した。

同じ「漢字が書けない」という現象であっても、その背景は様々である。視力低下に対するメガネのように、個々の困難の背景に合わせたオーダーメイドの支援が必要である。同じ介入方法では、かえって苦痛を生じさせる可能性がある。

② 適切な「学習量」の確保

困難を抱える子どもを追い詰めないよう学習量を減らすことを試みたが、結果として

定着に至らず、自発的な取り組みにつながらなかった。「やらなくてもいいよ」「できるものだけでいいよ」という考え方には、その子の力がつかない状況を生み出すことにつながり、適切な支援ではない。苦手な方法での学習量を減らすことは正しいが、専門職として、減らした分だけ取り組める方法を考え、学習量を確保する必要がある。

● 道具の活用で学習参加を保証

支援において、教材や道具の活用は非常に重要である。苦手なことを子どもの苦手な方法で変えようとする（遠回り）のではなく、使いやすい道具に変えることで、子どもがすぐに授業に参加できる状況を作り出していく。

・マグネット式定規の例

定規を押さえることが困難な子に、マグネット式の定規とシートを提供したところ、すぐに直線が引けるようになった。従来のように「もっと練習しなくちゃ」と努力を強いるのではなく、道具を変えることで、練習を必要とせずとも授業に参加できる状況を作ることが、学習機会の損失を防ぐ。

● 学習機会の重要性

失読症（ディスレクシア）の当事者である夫の事例から、困難があってもICT機器などを使い読むこと書くことに触れ始めると、驚異的な速さで力が向上することが分かった。

機会の喪失は、障害の困難性以上にリスクとなる。子どもにとって、今の学習に参加できる状況を作ることが、学習機会の損失を防ぎ成長を促進する。「じゃあ一生その道具を使うのか」という質問もあるが、多くの場合、子どもは成長し正しい練習を積めば、その道具なしでもできるようになっていく。

● 困難の背景を見立てる

支援では、「読めなくて困っている」「書けなくて困っている」という現象ではなく、「一体どこからこの困難が来ているのか」という背景を分析することが重要である。

一つの学習活動（例：漢字を書く）は、様々な力に支えられている（認知、運動、記憶など）。「支援が必要な子」であっても、すべての力が落ちているわけではない。

「何で」「どうして」という、問題が子どもの側にあるという発想ではなく、「困難の背景」に目を向ける必要がある。困っていることは現象（絶対に見える）であり、背景は仮説（予想しかできない）である。この仮説を検証し、支援の手立てを探るプロセスが非常に重要である。

● 支援の方法論：トレーニングへの注意

単に特定のトレーニング（例：ビジョントレーニング）を実施すれば、広範囲の課題（例：漢字）が改善するという考え方には警笛を鳴らす。

特定のトレーニングで上るのは、その特定の力のみである。課題の評価なしにトレーニングを適用しても効果は見込めず、子どもに「できない経験」を積ませるだけである。大切なのは、苦手を訓練して克服させるという従来の医療モデル的発想ではなく、学びにくさとともに学ぶという社会モデル的発想である。

II 「好き」のチカラ

● 「好き」という気持ちは学習のきっかけや突破口になる

「わかった」の入り口が見つからない子どもには、「好き」が突破口になる。

事例 1：Xさんのこと

Xさんは恐竜、海中生物、図鑑、タブレットが「好き」であった。Xさんの「知りたいこと」「好きなもの」を手掛かりに平仮名の学習を始めた。

まず、好きな恐竜のカード（46文字すべて）を作り、音と字をマッチングした。好きなものを通して、文字を音と結びつける練習ができ、自ら読み始めた（例：「これ何」と言ってトリケラトプスを読む）。

また、個別最適化されたアプリでの学習に熱中し、ひらがなの課題設定にもかかわらず、自らカタカナで学習を継続した。フリック入力を習得したが、きっかけは、「言いたいこと」を支援者に伝えるためであった（言語能力の発達よりも伝達意図が先行）。

本人は、「iPadを使っているのは僕なんだ」と感じ、学習の主体になることができた。また、言葉が留まる情報（紙に書いて渡す）になったことで、衝動的な不適応行動が減少した（例：「大事な話はしないでください」）。

読書に関しては視覚障害者等向けデジタル図書館の音声図書貸出システムを導入し、自分のペースで好きな本を選んで聞くことができるようになった。これにより、読書量が劇的に増加し、言葉の力や自尊感情が向上した。

事例 2：Zさんのこと

Zさんはよく喋るが、言葉とイメージがつながりにくかった。算数（繰り上がり・繰り下がり、暗算）に困難があった。パターンが好きで、分かっていることの繰り返しを好んだ。

支援として、まず計算にバーを使い、数のイメージを視覚化して計算を可能にした。また、掛け算の九九を丸暗記ではなく「見たら浮かぶ覚え方」にすると、短期間で習得した。

割り算のあまりの計算では、「超える・超えない」のイメージが掴めないため、間の数字がすべて見える九九の表（ICT活用）を使用した。視覚的に「超えてはいけない数」を理解することができた。

また、ローマ字入力、都道府県マスター、切り絵など本人の「好き」を教材にして学習を続けた。「できる」が増えて自信につながり、学習意欲や知識、技術が高まった。

III 道具を使う力

● 学びにくさがあるからこそ、状況に応じた「武器」を持たせる

- ① リコーダーで技術が習得できず苦しんでいる子に対し、穴をふさぎやすいリコーダーを支援として使用。人前で曲を意欲的に発表するまでになった。
- ② 読みの困難が大きくテストで点数が取れない子に対し、PowerPointの読み上げ機能を使うことで、本来の理解度に対する点数を取ることができ、正当な評価を受けられた。

- ③ 長い文章を構成することが難しい子が卒業文集を書く際、負担を減らすためにAIで文章を作成し、自分で加筆修正ができた。

あらゆる道具を使うことが社会では許されている。子どもたちも「道具を使う力」を含めて評価される時代になっていくべきであり、道具や方法といった「武器」を持たせていくことが必要である。

● 行動面の課題を抱えている子

学力保障は最大の生徒指導。「学びにくさ」が行動面での課題を引き起こすことがある。「今できる」状況を作り出すことは、子どもたちに自己肯定感と次の学習への意欲を与え、学習の主体に変える。

IV 学びにくさのある子どもの「好きのチカラ」

● スモールステップ

どの教科でも共通して、学習の前提となる情報が子どもに伝わっているか（授業に参加できる手立てがあるか）を考える必要がある。そのためには、「選ぶ」（参照する）が先決である。

課題の大部分を補った上であと1つの所をスモールステップで登らせ、自信や見通しの広がりを持たせることで、新しい課題に向かう力をつけることができる。「できないのは仕方ない」と子どもの側の問題としてあきらめるのではなく、手立てを探って手渡す役割を教師が担う。バトンは教師の側にある。

まとめ

特別な支援が必要な子とは、皆と同じやり方では学びにくい子であり、本人に合わせた支援が「必要」である。毎日授業をしているということは、毎日、毎時間、その子の学び方のアセスメントと試行を繰り返しているということである。私たちは「この子の学びのプロ」として、日々支援の在り方を考えていきたい。



第1分科会 特別支援学校：生活単元学習

分科会テーマ「主体的な学びの実現に向けた生活単元学習の指導・支援の在り方」

討議の柱 ○主体的な学びのある授業づくり

○一人一人の障害実態に即した指導・支援の在り方

助 言 者	広島県教育委員会
授業・提案者	特別支援教育課 指導主事 寄能 智貴 広島県立広島北特別支援学校
提 案 者	教諭 永田 純子 広島県立広島北特別支援学校
司 会 者	教諭 中村 春日 広島県立広島北特別支援学校
記 録 者	教諭 松岡 美幸 広島県立広島北特別支援学校
	教諭 國重 美早



I 提案・協議

提案1

「学習発表会に向けて」

広島県立広島北特別支援学校 教諭 永田 純子

【質疑応答など】

- 生徒の主体性を重視しながら、一人一人の実態に応じた支援が準備されており、視覚的な支援やタブレットの活用が効果的に実行されていた。
- 生徒自身が自己評価や他者評価を通じて主体的な学びを深めることができていた。
- 特別支援学校ならではの環境や指導（実態に合わせたグループ及び個別学習など）の重要性が確認できた。
- 特別支援学校の環境や支援方法が、小中学校とは異なり、生徒への適切な配慮と学びの可能性を広げる観点で参考になる点が多かった。
- 教師が生徒一人一人に適切な目標を設定し、学びやすい環境を提供している点への気付きが示唆された。
- 教師の正確な実態把握や準備が、生徒の主体性をはぐくむ教育実践につながっていた。

提案2

「主体的な学びの実現に向けた生活単元学習の指導・支援の在り方」

広島県立広島北特別支援学校 教諭 中村 春日

- 単元(題材)計画・授業シート(以下、単元シート)の活用によって、一単元で終わってしまいやすい学びを他の単元や教科の学習活動を繋げることができている。それによって、教師同士、教師と生徒、そして生徒同士の関わり合いや成長を促すきっかけも生まれやすくなっている。
- 単元シートを用いて単元目標や評価規準を細かく設定し、全体で共有することで指導の統一性を図ることができている。
- 授業改善とカリキュラムマネジメントにおいて、単元シートの活用が中心となり、生徒の個々の目標設定や支援方法を計画的に構築していく効果が見られる。
- 課題として、生徒間の社会性や協調性を育てるための関わりをさらに強化する必要性が指摘された。

II 助言内容

助言者：広島県教育委員会 特別支援教育課 指導主事 寄能 智貴

本分科会のテーマは「主体的な学びの実現に向けた生活単元学習の指導・支援の在り方」であり、協議の柱は「主体的な学びのある授業づくり」と「一人一人の障害実態に即した指導・支援の在り方」である。キーワードは「主体的な学び」である。

永田先生の授業と指導で素晴らしいところは、何事も丁寧で、教材が生徒にとって分かりやすいように工夫していたところである。生徒個人の課題に適したイラストの付いた目標カードといった視覚的な支援、生徒の興味・関心をひきつけるスライド画像とタブレットを使った即時反映型のワークシートなどは、生徒が活動に参加している感覚と友達とやりとりする楽しさを提供するものであった。

公開授業では、前単元で扱った「修学旅行」をテーマにした学習発表会の発表を振り返り、より良い発表にするために工夫点を設定して練習し、その後、相互評価した。発表内容は、生徒たちが国語、音楽そして総合的な学習の時間を活用して準備したものであり、こうした教科横断的な学びを通じて生徒達は学習内容を自分事として、目標達成に向けた意欲を引き出された状態で本時の活動に臨むことができていた。

発表する場面やお互いに評価しあう場面では、「(目標達成を意味する) 花丸！」という目標を達成したい気持ちを言葉で言い表す姿や友達の発表を見て「声が小さい。ばつ。」などと積極的に発言する姿が見られた。

植草学園大学名誉教授 名古屋恒彦氏は、各教科を合わせた指導の魅力として「本気になれる魅力」「活躍できる魅力」「仲間と共に生活する魅力」の3点を挙げている。今回の授業は、この3点が「やりがい」「生徒一人一人の魅力の発揮」「仲間との楽しい生活」という形でうまく実現され、その効果が確認されたといえる。学習発表会の発表をより良いものにするために工夫するという明確な目標を生徒一人一人が意識しながら、永田先生の指導と支援を受けて、それらに生徒たちが主体的・相互的な学び、達成感を感じる姿を示すことで応える授業となった。

第2分科会 小学校：生活単元学習

分科会テーマ「主体的な学びの実現に向けた生活単元学習の指導・支援の在り方」
討議の柱 ○児童一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方
○児童が主体的に学習に取り組むことができる授業づくりの在り方



助言者 広島県教育委員会

特別支援教育課 指導主事 玉林 和絃

授業・提案者 北広島町立本地小学校 教諭 平野 歩夢

提案者 竹原市立吉名学園 教諭 藤元 恵

司会者 北広島町立芸北小学校 教諭 山本 韶

司会者 竹原市立竹原西小学校 教諭 沖永 貞浩

記録者 北広島町立八重小学校 教諭 岡田 美幸

I 提案

提案1

「えんじさんと なかよくなろう（2）」

北広島町立本地小学校 教諭 平野 歩夢

【質疑応答他】

- 小学校と保育所がとても近く、昨年度から園児さんと交流している。
- ①目的を共有する、②見通しをもたせる、③自己決定させるという3つのことを大切にしている。見通しをもたせるために、することが明確になるよう掲示物で残している。
- 参観者と一緒に活動した後、児童が仲良くなるためのポイントを使ったかを確認した。その後、参観者からアドバイスをもらい、もう一度同じ活動を取り入れたのが良かった。
- 活動中の様子を録画し、それをテレビ画面で確認しながら（ICTの活用）、振り返りをさせるのが良かった。
- 活動の目的（園児さんと仲良くなる）は担任が示すが、目標と手立てを児童に決めさせることで主体的に活動することができた。
- 参観者からのアドバイスを児童が直接聞きに行くのが良かった。相手の顔を見て、挨拶や返事をすることができていた。
- できたことは花丸をつけ、帰りの会などで視覚的に評価をしている。

提案2

「児童の『願い』から始める生活単元学習」

竹原市立吉名学園 教諭 藤元 恵

【質疑応答他】

II 協議

- 活動が終わった後、良かったところとうまくいかなかったところを確認し、次の活動に生かした。
- お客様に楽しんでもらうという目的でお祭りでしたが、困ることがたくさんあった。写真や動画を見たり、担任や友達に聞いたりして確認し、改善した。
- 児童のつぶやきと行動のつながりをよく見ておくことが大切である。
- ものさしと測る物がずれないよう、L字型の厚紙を机に貼りつけ、ストッパーにした。
- 筆圧の弱い児童のために、看板づくりは毛筆で書くようにした。
- チケットを用意することで、算数の苦手な児童の、集まったチケットの数を数えたいという意欲につながった。10のかたまりや位取りができるようになった。
- 目標（願い）を毎時間確認することで、児童はやりたいと思うことを、あきらめずに頑張ることができた。

III 助言内容

助言者：広島県教育委員会 特別支援教育課 指導主事 玉林 和紘

今回のテーマ「主体的な学びの実現」に迫る授業実践になっていた。

平野先生の授業は、どうすれば園児さんと仲良く関わることができるのか、園児さんが喜んでくれるのかを児童自身が考え、準備計画しているのがすばらしかった。生活単元学習の領域の内容の達成を学習指導要領に基づいて整理されていた。活動を通して、どのような資質能力を育むのかを明確にしておくことが重要なポイントである。本单元における本質的な問い合わせ、单元を貫く問い合わせきちんと設定されていた。また自己決定の場がしっかりと設定されており、自己評価と他者評価の場面設定もされていた。計画、実施、振り返り、改善の一連の活動で学びが次につながっているところもすばらしかった。

藤元先生の授業は、児童の願いから構成されていた。準備の段階でお祭りに必要な商品や道具の個数を具体的に提示することで、活動のゴールが明確にされていた。そのことで、児童はここまでできたという達成感を得ることができた。また活動の中で児童自身の力でできるための工夫が随所に見られたところも大変すばらしかった。主体的な学びを引き出す工夫として、①児童の得意なことを踏まえた役割分担、②児童の実態に応じた思考場面の設定、③児童自身が改善案を考えるという3つのことをされていた。個に応じた配慮や役割分担などをすることで、自分たちでする活動が増え意欲につながった。

知的障害教育における主体的な学びのキーワードは、①学ぶ意義、②見通し、③振り返りと次への期待である。生活単元学習において、児童生徒が主体的な学びを行うためには、单元の流れが実際の生活に即しており、児童生徒の見通しや必然性をもって学ぶこと（自分事化）が重要である。また活動を通して、どのような資質能力を育むのかを明確にしておくことが重要なポイントである。資質能力を育むためには、主体的対話的で深い学びを更に進めていく必要がある。体験で終わらせるのではなく、体験から経験へ、経験から学びへ、学びから能力へつなげていく視点が大切である。また单元で学んだことを次の单元につなげ、各教科の指導で学んだ内容や培った力を働かせるための場面設定が重要である。これらの視点を踏まえ、自校における生活単元学習の授業改善や教育課程の改善を進めてもらいたい。

第3分科会 小学校：教科の指導

分科会テーマ「児童一人一人の教育的ニーズに応じた教科の指導・支援の在り方」
討議の柱 ○一人一人の教育的ニーズに応じた教科の指導・支援の在り方
○主体的な学びを促す指導・支援の在り方



助言者 広島県教育委員会
義務教育指導課 指導主事 田村 沙織
授業・提案者 北広島町立八重東小学校 教諭 辻 裕介
提案者 広島市立戸坂城山小学校 教諭 長藤 祐輝
司会者 北広島町立豊平学園 教諭 佐渡 朋恵
司会者 広島市立宇品小学校 教諭 本吉 麻実
記録者 安芸太田町立加計小学校 教諭 大上 優那

I 提案

提案1

「目指せ、円の達人！」

北広島町立八重東小学校 教諭 辻 裕介

【質疑応答など】

- 算数が苦手な児童向けに、視覚的・操作的な支援（セロハン・言葉カード・ヒントブックなど）と、集中ブース・円卓などの構造化された環境が整備されていたことが効果的だった。
- 見通しの可視化（単元掲示・シール進捗）、学び方の選択（計算型／操作型）、円卓での対話促進などを組み合わせて学習が支援されていた。
- 児童同士の説明・比較が活性化し、学習へ向かうことがスムーズになった一方、「形と式のつながり」の理解に対する工夫は改善の余地があるとの指摘があった。
- ホットケーキの設定は興味関心と内容に合っていた。白抜き図形で形を発見する活動や、視覚補助カードの追加、操作先行の学びの充実などが改善案として挙がった。

提案2

児童が「これならできる」と思える国語科の取組 ～学習方法を選択する活動を通して～

広島市立戸坂城山小学校 教諭 長藤 祐輝

II 協議

- タブレットと手書きの選択を与える意義はあるが、児童がタブレットを安易に選びがちな点や、手紙では手書きの価値が高いことの指摘があったが、国語科の目標である文章構成力の育成に基づき、漢字学習は手書きを基本とし、活動目的に応じて手書きとタブレットを使い分けていると説明があった。
- 国語科での学びが他教科にどう生かされるかの質問に対し、自立活動での作品説明などで成果が見られたとの回答があった。
- 児童が学習方法を選択でき、自分のペースで進められる環境が、書くことへの意欲を高めている。
- 今後は、手書きとタブレットの適切な使い分け、国語科の学びの他教科への活用、選択制の効果検証について継続して検討する必要がある。

III 助言内容

助言者：広島県教育委員会 義務教育指導課 指導主事 田村 沙織

「一人一人の特性や困難さの要因に応じた指導と支援の重要性」について。

長藤先生の実践では、書くことが苦手な児童への支援がよい。特に児童の手紙の成長を例に、手書きとタブレット端末という複数の選択肢を用意し、児童が自分に合った方法で学べる環境を整えた点が効果的だった。児童が抱える書字の困難さには視覚認知、眼球運動、修正の苦手さ、内容整理の難しさなど多様な要因があるため、「タブレットにすれば解決」という単純な発想では不十分である。手本の提示や構造化されたメモの使用など、要因に応じたきめ細かな支援が必要である。また音読における困難についても、根本要因を分析したうえで、分かち書き、スリット、読み上げ機能など異なる手立てが必要である。今後への期待として、一人一台端末のより高度な活用（読み上げ機能、プレゼンテーションソフト、マインドマップ等）と、動画・写真を用いた学習の振り返りの充実が挙げられ、自己評価を通じた成長を感じさせることが重要である。

辻先生の算数の授業は、構造化された環境づくりとヒントツールの充実していた。「のびのびカフェを開く」というわかりやすい単元ゴール、視覚的に確認できる進捗シール、ヒントコーナー・個別ブース・話し合いコーナーなどの活動場所の構造化、板書・ノートの整理、既習内容をまとめた冊子の提供など、児童のつまずきや学び方に応じた準備が行われていた。また難易度を選べる問題設定や、セロハンなどの教具を用いた協働的学習によって、児童が自分のペースで主体的に学べる点も意欲につながる。今後は、グループ学習のねらいをより明確にし、友達の考えを比較・分類・関連付ける学びを継続することが大切である。

最後に特別支援教育の経験から、子どもが自分の良さを理解し、力を發揮することの重要性がある。自己理解は他者理解を促し、多様性を受け入れながら共に学ぶ基盤となる。教師は児童の発達段階や特性を踏まえた適切な指導と支援により、主体的な学びを実現し、「できた」という達成感と自己肯定感を育むことが使命である。

第4分科会小学校：通常の学級と通級指導教室における指導

分科会テーマ「通常の学級に在籍する児童への教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方」

討議の柱 ○一人一人の教育的ニーズに応じた通級指導教室における指導・支援の在り方

助言者 広島県立教育センター

特別支援教育・教育相談部

指導主事 廣藤 香織



提案者 北広島町立壬生小学校 教諭 大野 元子

提案者 福山市立駅家西小学校 教諭 矢田 敏恵

司会者 北広島町立豊平学園 教諭 西廣 俊之

司会者 福山市立緑丘小学校 教諭 稲田 英夫

記録者 北広島町立壬生小学校 教諭 和田 真織

I 提案

提案1 「ねえ聞いて、こんなことしたよ」

～したことをじゅんじょよくつたえよう～

北広島町立壬生小学校 教諭 大野 元子

【質疑応答など】

○担任の先生に自分の経験したことを伝えるという課題設定が、児童の主体的な学びに効果的であった。

○指示を一つずつ丁寧に押さえ、課題を児童と確かめて進めていたことがとても良かった。
スモールステップで文章を作る（写真を並び替える・どんな場面か言葉にして表す・順序を表すキーワードを使って話す）ことで、児童が自信をもって活動を進めることができ、文ができた時の達成感を高めることにつながっていた。

○児童の得意なことや苦手なことが焦点化された学習計画になっていたのが良かった。

○児童の言葉を指導者が適切にとらえ細やかに評価を入れることで、児童の活動意欲を高めることができていた。

○体幹トレーニングを活動のどこで取り入れるかなど、児童の実態や、活動の様子を見て順番を組み立てることが大切である。

提案2 通常の学級に在籍する児童生徒への教育的ニーズに応じた教科の指導・支援の在り方

福山市立駅家西小学校 教諭 矢田 敏恵

II 協議

○眼球運動や体幹トレーニングを通級指導で取り入れることで、眼球運動が改善し文字を目で追うことができるようになったり、感覚過敏が軽減されたりした実践が参考になった。また、家庭でも宿題で取り組んでもらうことで効果が上がる事が分かった。

- 高学年で眼球運動やサーキットトレーニングに取り組む場合、技の段階を上げるなど、自分たちで主体的に取り組むことができるよう工夫している。主体的に活動を進めていけるよう、児童の発達段階に応じた仕組みを作ることが大切である。
- 学級担任・他校との連携では、「ほっとルームノート」を活用し学級担任・保護者・通級担当者の三者で情報共有を図っている。主に児童の成長や、良いことを記述することで、家庭と学校が協力し、より効果的な児童の指導・支援を行っていくことができる。
- 巡回して通級指導をする場合、担任との連携や各機関との連携が取りにくいが、担任と電話で連絡を取り合うなど、方法を工夫して綿密に連携を行うことで指導に対する不安感を軽減し、保護者にも安心してもらうことができる。今後も、連携の仕方について改善、工夫を図っていきたい。

III 助言内容

助言者：広島県立教育センター 特別支援教育・教育相談部 指導主事 廣藤 香織

近年、文部科学省の方針として「すべての教師に特別支援教育の専門性を高めること」が求められている。障害のある児童生徒だけでなく、多様な児童が通常の学級に在籍している現状を踏まえ、全教職員が合理的配慮やICT活用、個別の教育支援計画づくりに取り組む必要がある。そのため、特別支援教育支援員や専門家の助言を受けながら、学校全体で専門性を高める文化づくりが大切である。通級担当教員は、児童一人一人の実態に応じて柔軟な指導方法を用いる力と、通常学級担任等への助言・提案力が求められている。大野先生や矢田先生の実践は、その点で非常に示唆的であった。

大野先生の実践では、授業の準備段階で、児童の学級での様子の観察から始める姿勢が素晴らしい。通級での指導を考える際に「学級での姿」を意識することが専門性の表れである。題材（自らの体験を順序だてて語る）も工夫されており、指導者自身が児童と一緒に体験する点が特に秀逸である。このことは、児童の語彙力や表現力を自然に高めることにつながっている。また、担任との連携も効果的であった。担任からのメッセージが児童の意欲・達成感を支えている。通級と学級が「児童をともに育てる」構造になっており、学校全体の理解促進にもつながっている。結果として、児童だけでなく担任の指導力向上にもつながる好事例である。

矢田先生の実践は、1年間の継続的な取組で児童の変容が明確に見られた点が素晴らしい。実態把握が表面的ではなく深く行われ、それに基づいた系統的・選択的な読み書き指導がなされていた。学校内外の「連携（校内支援委員会）」が円滑に機能していたのは、普段からの情報発信と丁寧なコミュニケーションによる信頼関係の構築が背景にある。専門的な内容を難しい言葉ではなく、誰にでもわかる言葉で伝えていた点が重要である。そのことで、担任や他校の教師も「一緒に考えるチーム」として関わることができた。

今後は、学校全体に支援の文化を広げることが大切である。特定の先生だけに支援を依存させるのではなく、学校全体で継続的に支援を行う体制を整備していくことが重要である。通常学級にも教育的支援が必要な児童は多く在籍しており、各教師がそれぞれの立場で何ができるかを考え、実践を積み重ねていくことが求められている。通級や特別支援学級の枠を超えて、全職員が児童理解を深め、互いに学びあうことにより「支援の文化」が根付く学校づくり推進していくことを期待している。

第5分科会 中学校：作業学習

分科会テーマ「主体的な学びの実現に向けた作業学習の指導・支援の在り方」
討議の柱 ○主体的に活動に取り組む指導・支援のあり方

助 言 者 広島県教育委員会



特別支援教育課 指導主事 若松 亮太
授業者・提案者 北広島町立千代田中学校 教諭 日高 恵
提案者 府中市立上下中学校 教諭 中野 公裕
府中市立第一中学校 教諭 井上 雅代
司会者 北広島町立豊平学園 教諭 井丸 真由美
司会者 府中市立第一中学校 教諭 出原 孝則
記録者 北広島町立芸北中学校 教諭 佐々木 圭子

I 提案

提案1

「ふるさとの魅力を伝えよう～神楽面作り～②」

北広島町立千代田中学校 教諭 日高 恵

【質疑応答】

- 授業の流れが明示してあり主体的に取り組む工夫がされていた。
- 個別で作業確認する上で視覚化された工夫がされている。
- 作業手順を示したシートやチェックシートによって、何をするか明確にわかり主体的に取り組むことができている。
- 視覚的な見通しや適切な目標設定により、主体的な学びに到達している。
- 作業終了の報告に対する教師の言葉掛けが適切であった。
- 生徒自身に目標を立てさせてることで、意欲的に取り組んでいる様子が見られた。
- 神楽面の見本は本人たちが失敗したものも含めて教室に置いている。失敗を繰り返しながら、課題を修正してより精巧なお面を作ることにつながった。
- 自分たちが作った神楽面が地元の道の駅で販売され、売れていることも生徒のやりがいにつながっている。
- 環境設定がシンプルで情報の精選がされているためノイズがなく、集中して取り組むことができる。
- 学習内容が具体的で、生徒の特性を生かした作業学習となっている。
- 興味・関心を持てる課題設定やわかりやすい作業工程など、長期的な見通しを持った作業学習となっている。

提案2

「他者の役に立とうとする気持ちを育む学びを通じて、将来の職業生活につなげる作業学習」

府中市立上下中学校 教諭 中野 公裕

府中市立第一中学校 教諭 井上 雅代

II 協議

- 「実践する」→「反省」→「改善」という繰り返しを大切にされていて、P D C Aサイクルがきちんと確立されている。
- 生徒が企画・運営していくことで主体的な学びとなっている。
- 通常学級の生徒との交流を通して、コミュニケーションを大切にすることで主体的な活動となっている。
- 学校運営協議会の方々から色々提案していただいたり、教育委員会による藍染め体験の出張講座をしていただいたりして、地域や行政の協力を得ながら、主体的に学べる環境が整っている。
- 「人の役に立ちたい」と生徒自身が思える指導により、主体的な学びとなっている。
- 府中市がI C T支援員を設置しており、生徒もクロムブックや「Canva」といったI C Tを効果的に活用し、主体的な学びにつながっている。

II 助言内容

助言者：広島県教育委員会 特別支援教育課 指導主事 若松 亮太

分科会テーマについて、参加者のみなさんと考えていきたい。まず、主体的な学びの先には、資質・能力の育成があり、主体的な学びと資質・能力の育成を往還しながら、主体的な学びを実現していく必要がある。また、主体的な学びを実現していくためには、「なぜ」「何のために」という目的や意味を生徒が理解していくことも大事である。

作業学習は学習や生活の流れに即して効果的に学べるので、学習活動の中心に据えて各教科と合わせた指導を行ってほしい。その際は、各教科の目標を達成し、育成を目指す資質・能力を明確にした指導計画を立てる必要がある。また、各教科と合わせた指導をしていく上で、働く意欲を培い、将来の職業生活や社会的自立に向けた基盤となる資質・能力をはぐくむなど、必要な事柄を総合的に取り入れながら指導していくことに留意したい。

本日の授業や提案には多くの示唆があった。授業では生徒の実態から題材を設定し、指導計画を立てるという流れがきちんとできていた、授業デザインの重要性を感じさせられた。また、Aくんは活動中、神楽面の塗り残しに気付いて塗り直しをしていた。これはいいものをつくりたいという意欲の表れでもあり、働く意欲にも大いにつながっていく。提案は「誰かのために」という生徒の思いをベースに、P D C Aサイクルがしっかりしている。授業、レポート提案とも主体的な学びの実現に向けたものであった。

第6分科会 共通

難聴・言語障害のある児童生徒への指導

分科会テーマ「自立に向けての一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援の在方」
討議の柱 ○教育的ニーズに応じた主体的な学習を促す言語指導・支援の在り方



助言者 広島県教育委員会

特別支援教育課 指導主事 成松 晴菜

提案者 東広島市立八本松小学校 教諭 住吉谷 由紀

司会者 東広島市立入野小学校 教諭 加藤 訓子

記録者 北広島町立八重小学校 教諭 上本 祥詞

I 提案

提案 言語障害

「吃音と向き合い、表現しようとする児童を育てる」

東広島市立八本松小学校 教諭 住吉谷 由紀

【質疑応答他】

- 吃音のある2年生とのインタビューでのやり取りの中で、「吃音は100人に1人だから特別な経験ができる人、僕らは苦労した分だけ乗り越える力がつく。」という思いを持つことができていた。インタビューの答えを考えることは、本児童が吃音をどう自覚しているか見つめ直すよい機会になった。
- インタビューを対面で行い、実際に2年生と関わりを持てたことで、6年生に気持ちの変容が見られて6年生のためになった。
- 自分自身を表現する場面づくりとして、自分物語を作成していく中で、吃音をなくすのではなく、吃音のある自分を受容して思いを表現することができたことは、すばらしいことである。
- 中学校進学に向けて自分物語を作成したことは、自分の事を理解してもらえるという安心感につながり、とても有効である。
- 今後も吃音を失敗として捉えて落ち込むのではなく、吃音が出ても自分の思いを伝え、理解される経験を積み重ねることで、安心して自己表現できるような支援をしていく。

II 協議

- インタビュー形式にすることで、自分の吃音と向き合うことができた。
- 小中連携の時には、6年生担任と通級担当と中学校担任を中心に実態交流をした。本人の吃音の理解を周囲がする「環境調整」が大切である。
- 交流会の様子を教職員全員に研修で周知されていることで、吃音のある児童にも関わる

教職員にも、良い環境づくりになっている。

○環境が変わっても吃音を気にせずに話せるようにするにはどうしたら良いか。

Ⅲ 助言内容

助言者：広島県教育委員会 特別支援教育課 指導主事 成松 晴菜

住吉谷先生の実践は、小学校卒業から中学校という新たなステージへと進む児童に対して、障害の正しい理解や自己受容、自分自身の思いの表現といったとても大切な事に焦点をあてた素晴らしい実践で、大変勉強になる取組であった。

取組から学ぶこととして4点ある。1点目は、自立活動の内容を参考に児童の困り感や願いなどを含む的確な実態把握から、児童の教育的ニーズに応じた指導内容の設定をされていた。的確な実態把握が何よりも重要で、児童の表面的に見られる様子のみならず、児童が抱えている困り感や願いを、児童との丁寧な会話から情報収集をしていた。2点目は、児童が興味を持って主体的に取り組めるような内容の工夫がされていた。教師が何を教材にしたら興味を持って取り組めるのかを、児童の実態からの的確に設定されていた。他者からのインタビューに答える必然性や、パソコンが得意なことを生かして自分物語をまとめてそれを交流会で発表するという必然性を持たせている所が、児童の魅力的な取組につながっていた。3点目は、障害を持つ他者の意見にふれたり、同じ障害を持つ他者と出会う場を設定したりしていた。心境を分かち合える仲間がいるということは、とても心の支えになり、前向きに頑張る気持ちを持つことができる。4点目は児童の思いや考えを受け止める温かい教室になっているところである。児童が自身の吃音の症状などについて心を開いて話ができていた。言葉の教室に通った2年間が、児童にとって心を強くするきっかけになっていた。

自立活動を行う際に意識してほしいことが2つある。①児童生徒自身が自分は何のために何をするのか、目的を自覚して学習に臨むことで、自分に必要な力を意識して学習に取り組むことができる。その際には、どこまでねらいが達成できたか、自己評価を取り入れていくことが大切である。②発達段階にもよるが、自分の得手不得手を理解できているのであれば、今の自分を振り返ってどのような活動がしたいのか本人の意見を聞いてみると良い。

新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議の報告をする。特別支援学級、通級による指導を担当する教師に求められる力の1つとして、自立活動を実践する力が挙げられている。この力が必要な理由は、自立活動は障害を持つ子どもたちが学習場面や日常生活で困っていることを改善克服する活動であり、各教科等の学習や日常生活の基盤となる大変重要な学習であるからである。指導に当たっては、子どもたちそれぞれが学習場面や日常生活で困っている事を、それぞれの障害の状態や特性、実態に合わせて指導する。個々の実態に応じたオーダーメイドの指導をすることが、分科会のテーマである一人一人の教育的ニーズに応じた指導支援につながる。オーダーメイドの指導ができるのが、自立活動である。しかし、課題として障害の状態等を考慮せず、一律に「〇〇トレーニング」と言った特定の活動を持って通級による指導をしている現状もある。これは自立活動の指導としては適切ではない。個々の児童生徒の実態から課題を捉え、指導目標や内容を設定する。その際に子どもの実態をどのように捉えたのか、なぜその指導目標や内容を設定したのか、設定に至るまでの過程を明確にして、根拠を踏まえた指導を行うことが必要である。また、指導に当たっては、各教科等との指導の関連や評価の活用による指導の改善も重要である。児童生徒の自立に向けた一人一人の教育的ニーズに応じた指導支援のために、自立活動の指導のさらなる充実を期待する。

第 65 回広島県特別支援教育研究大会山県大会

役 員 名 簿

大 会 長	広島県特別支援教育研究連盟理事長	西 山 美 香
副 大 会 長	広島県特別支援学級・通級指導教室設置校校長会会長	堤 信 之
	広島県情緒障害教育研究会会長	榎 木 勉
	広島県難聴・言語障害教育研究会会長	山 領 熱
運 営 委 員	広島県特別支援教育研究連盟副理事長	福 田 諭 子
	広島県特別支援教育研究連盟副理事長	恩 地 孝 明
	広島県特別支援学級・通級指導教室設置校校長会副会長	福 田 諭 子
	広島県特別支援学級・通級指導教室設置校校長会副会長	森 田 真 伸
	広島県情緒障害教育研究会副会長	福 田 論 子
	広島県情緒障害教育研究会副会長	並 川 聰 之
	広島県難聴・言語障害教育研究会副会長	岩 渕 満
	広島県特別支援教育研究連盟事務局長	寺 山 洋
	広島県特別支援学級・通級指導教室設置校校長会事務局長	植 田 恵理子
	広島県情緒障害教育研究会事務局長	木 戸 麻 里
	広島県難聴・言語障害教育研究会事務局長	中 村 比路美

現地実行委員会

実行委員長	北広島町立八重小学校校長	江 崎 繁
副実行委員長	北広島町立千代田中学校校長	森 近 泰 典
	北広島町立壬生小学校校長	藤 田 一 友
事務局長	北広島町立八重小学校教頭	鍵 谷 聖 子
会計	北広島町立八重小学校教頭	鍵 谷 聖 子
監事	広島県立広島北特別支援学校教頭	花 本 昭 子
分科会運営責任者	広島県立広島北特別支援学校教頭	花 本 昭 子
	北広島町立本地小学校教頭	廣 田 麻友美
	北広島町立八重東小学校教頭	簗 田 薫
	北広島町立壬生小学校教頭	尾 崎 恵
	北広島町立千代田中学校教頭	中 島 貴 宏
	北広島町立八重小学校教頭	鍵 谷 聖 子
研究部 小学校担当	北広島町立八重小学校教諭	中 村 健大朗
研究部 中学校担当	北広島町立千代田中学校教諭	石 浦 可 愛